常設展示3階美術・工芸部門

シリーズ 「薩摩焼」（全10回）

No.3 白薩摩―素地用の「粘土」づくり

白薩摩の粘土づくりは、大変！

「高麗伝薩摩焼陶器製造図」より

上の3つの絵は江戸時代の粘土づくりのようすを描いたもの。何をしているかわかるかな？
一番左①は、餅つきをしているみたいだけど，臼に入っているのは餅よりずっと硬いもの。
前回紹介した白薩摩の原料です。まず細かく粉砕して、不純物を取り除かなくてはなりません。
なにしろ、白薩摩は藩主などが贈答品に用いる高級品！ とにかく丁寧に精製します。

じゃあ、具体的にはどうやるの？

お答えしましょう！

①は、杵と臼を使って土の粉砕をしているところ。「土春（つちつ）き」といいます。
採ってきた原料はいったん乾燥させて、それから粉砕するんだよ！

②は、細かく砕いたものを水の中に入れてかき混ぜているところ。「水干（すいひ）」といいます。
しばらくすると、中に混ざっている砂利や、焼き物に適さない粒の粗い重いものが底に沈み、細かな粒が上に浮いてきます。それをすくい取ったものが白薩摩用の粘土になります。

③は、笠沙陶石（かささとうせき）と指宿白土（いぶすきはくど）の「ネバ」・「バラ」を調合しているところ。
「土盤（どばん）で土を撃ちならす」と書いてあるので、叩いてそれぞれの原料を馴染ませているんだね。

こうして、ようやく粘土ができあがります。でも、まだ白薩摩をつくる準備ができたばかり！
焼き物づくりは、たいへんな重労働だったんだね。

質のいい粘土とわるい粘土はどうやって見分けるの？

ズバリ、白薩摩の表面をよ～く見てみよう！ 虫めがねを使うとよくわかるかも！
乳白色の素地の中に、黒いつぶつぶとか、小さな石みないものは入っていないかな？
入っていないものは、①から③の作業を丁寧に行っているってこと。これが上質な粘土ってこと。

現在は、機械で精製した粘土を買ったりできるけど、昔はぜんぶ人力でつくっていました。
古いものを見るとき、そんなことも思い浮かべながら見てみてね。

次回から、いよいよ白薩摩づくりに注目します。お楽しみに!!

学芸員 深港